

日本がん疫学研究会

がん疫学に対する風と目

愛知県がんセンター研究所・富永祐民

この小文のタイトルを「がん疫学はダメになるか？」にしようと考えていたが、あまりネガティブな印象を与えてはいけないと思って少しやわらかくし、「がん疫学に対する風と目」にした... と書けば、がん疫学に対して必ずしも暖かい風が吹き、がん疫学が暖かい目でみられていないと想像していただけたと思う。

◆ ◆ ◆

小生ががん疫学に転じたのは1977年である。1981年に名古屋でUICCの第1回開発途上国におけるがん予防会議（会長：日々野進、事務総長：青木國雄）が開催されたとき、故山村雄一先生が来賓として出席された。懇親会の後で先生を名古屋駅までお送りしたとき、車内で先生は「富永君、このままでは疫学はダメになるよ」と忠告された。時あたかもAmesテストが普及し、環境中の変異原物質（＝がん原物質）が定量的に、簡便に測定でき始めた頃であった。山村先生は古典的な疫学的手法ではがんの原因に迫れず、このままでは疫学は取り残され、無用になるのではないかと危惧されたのではないかと思う。そのとき小生は「はー」と生返事をし、心中では「なにおっ」と思い、しっかりしなければいけないなど、逆に兜の緒を締めた。数年経ち、Amesテスト万能時代は去り、疫学は生き残った。しかし、根からの生化学者、免疫学者の山村先生は亡くなられるまでついに、疫学を十分に理解、評価していただけなかった。文部省のがん特の「がんのコホート研究に関する研究班（班長：青木國雄）」が開始される前に検討班ができ、いろいろな分野の先生方からご意見を聞いた。青木先生の話によると、総括班の中でもこの班の開始に難色を示される先生がかなりあったという。がん特の評価委員であった山村先生と山村先生も難色を示された。小生はこの件で山村先生に直接接触したことはないが、山村先生とは接触した。ある日、青木先生と一緒にパレスホテルのロビーで山村先生にお目にかかり、新しい「がんのコホート研究」の必要性、平山雄先生が昭和40年に開始された計画調査とどこが違うか等、青木先生と二人で一生懸命説明した。山村先生は青木先生が「このコホート調査では尿や血液を取っていろいろ調べます」と言われたところで、「そうだ。そのような研究は面白い」とや

っとポジティブな反応を示された。最後に山村先生は「ロケットの打ち上げには巨額の費用がかかるが、理論的に計算されたとおりになるから無駄ではない」と言われた。「しかし、疫学に巨額の研究費を使っても無駄になるかもしれない」と思っておられたのかも知れないが、さすがに口にはされなかった。なんとか杉村先生、山村先生に黙認していただくような形でやっと「がんのコホート研究班」がスタートした。これにはがん特の総括班長の菅野先生の並々ならぬご理解と疫学に対するご期待があったからこそ、この研究班が日の目を見たと考えられる。それだけにわれわれは菅野先生らの関係者のご期待に応えなければいけないと思う。現在この研究班に参加しておられる先生方にはぜひ知っておいていただきたいと思う。山村先生にはそのほかの機会、例えば、厚生省のがん研究助成金による研究の班長報告会で「がんの疫学的研究」の報告を行った際にも何度か辛口のコメントをいただいた。しかし、小生は屈することなく、山村先生の言葉をバネの原動力にしてきた。山村先生はすでに天国へ旅立たれ、もはやこのような叱咤（激励）の言葉は聞けないのは残念であると思っている。

◆ ◆ ◆

国立がんセンター名誉総長の杉村先生にも折りにふれ、疫学に対する建設的、あるいは批判的コメントをいただいている。杉村先生は発がん実験、環境中の変異原・がん原物質の検索、発がんメカニズムの解明などで数々の優れた業績をあげられているが、その目的はがんの1次予防である。がんの疫学はヒトのがんを対象にしており、研究方法は異なるものの、最終目標はやはりがんの1次予防である。その点では「異床同夢」といえるかも知れない。これまでに杉村先生から「俺はがんの疫学を支援しているのだ」という言葉を何度か聞いたことがある。しかし、同じくらいの頻度で（あるいはもっと何回も？）「疫学は頑張らないとダメになるよ！」という意味のご忠告をいただいた。小生が理解するところ、杉村先生は我々が疫学的研究の結果を説明、解釈するとき、断定的に結論が下せない場合、苦しい紛れに、「・・・のようだ」、「・・・の可能性もある」、「・・・ではないかと考えられる」などのアバウトな表現をしたときに厳しいコメントが飛んできている。小生も過去にこの矢を何回か受けたし、杉村先生から他の疫学者に対して矢を放ったお話も聞いている。この矢が飛んでこないようにするためには、我々ができるだけきちんとした結果が

であるような研究を行うべきであるし、曖昧なご都合主義的な解釈や発言を避けるようにする必要がある。また、都合のよい結果だけを発表することも慎まなければいけない。それにしても、このような矢を飛ばしていただけることはありがたいことであると感謝している。

今回はまだ何人かのすでに第一線を退かれた先生の疫学に対するご意見やコメントも書きたいと思っていたが、すでに予定のスペースを使ってしまったので、NEWS CASTの編集担当者のお許しが得られたら、次号に続きを書かせていただきたいと思う。

V F 通信

《Veteranからのメッセージ》

経済的開発途上国の癌をもっと

倉 恒 匡 徳
(九州大学名誉教授)

編集担当の先生から、若い癌疫学者のために何か書けという有り難い要請がありましたので、言わずもがなのこととは思いますが、喜んで私見と期待を述べます。

若い癌疫学者の皆さん！日本人だけでなく地球上のすべての人々の癌、それも特に経済的開発途上国（以下途上国と略す）の人々の癌に、もっともっと深い関心を払い、積極的に調査・研究を行い、世界の人々の健康の向上に貢献して下さい。私が特に途上国の癌を重要視するのは、第一に、途上国の癌が良く分かっていないからです。途上国の癌については、報告も増え、IARCの出版物やシンポジウムのプロシーディングなどもかなり出ておりますが、まだまだ、先進国の癌に比較すれば、ほとんど分かっていないと言っても過言ではないと思います。第二には、途上国を調べることにより、途上国の人々から教えられる「大切なこと」が沢山あると考えるからであります。とかく、我々は、途上国の人々に対しては、教えることはあっても、教えられることは余り無いと考えがちですが、私は、途上国の人々の生活から、健康について、また癌について、学ぶことが沢山あると思っております。じっくり腰を下ろして、現地の研究者とともに、途上国の癌の調査研究に汗を流してみませんか。きっと宝物が次々と見つかることでしょう。

それに、昔と異なり、国外調査が随分容易になりました。もっとも、若い研究者の行う国外調査に対する国の研究費の援助は、未だに十分ではありませんが、自信のある研究プロジェクトであれば、研究費配分の要にいる人物に直訴してでも良く説明し、援助を要請すべきであると思います。食欲であって欲しいのです。それに癌の疫学者は、国の「対がん10カ年総合戦略」もあり、比較的恵まれているのではないのでしょうか。また、国際的な対癌機関や、昔に比べて著しく増加した国内の研究助成団体などが、皆さんの独創的な国際的調査研究を大い

に援助しようとしています。そしてこの傾向は今後益々強まっていくことでしょう。この内外の趨勢を認識し、大いに地球的に活動して下さい。

ご承知のように、Weston A. Price や H.C. Trowell, D.P. Burkitt等は途上国の人々の生活と健康を調べ、経済的に少しでも豊かになると、つねにどこでも、生活様式は西欧化し、“Western Diseases”が増えていくことを見だし、世界の西欧化の大きな流れに対して警鐘を鳴らしました。私は、癌疫学の研究においては、このような地球的視点が非常に大切であると思います。皆さん方の中から、第2、第3のPrice, Trowell, Burkitt が輩出することを期待いたします。

《Freshmanから一言》

私の疫学との出会い

井上 真 奈 美
(東京医歯大・難研・疫学)

もともと異なる言語や文化、遺伝的差異をもつ民族と自分とを比較することが好きだった私は、それらの民族が歴史的にどのように地球上を移動し混合した結果、現在の民族の特性ができあがっているのかに興味をいだき、将来は地誌学や民族学の道にでも進もうかと考えていたほどであった。そして医学部に進んでからも何となく未練が残り、医学とそれらの分野との接点を模索していた。そんな私の心をとらえたのが大学1年次に教養科目として（楽に単位が取れるという先輩の忠告を素直に受けて）たまたま取った「疾病の地理病理学」という講義で、ネパールやイスラエルなど見知らぬ土地の疾病分布が地図に示されその疾病の原因究明の過程が語られていくうちにすっかりその魅力にとりつかれ、結局、担当の教授の専門である疫学の世界に入り込んでしまった。入門して2年足らず、疫学ではまだまだ経験不足の若武者ではあるが、フィールドワークを通してようやく、疫学の対象が生身の人間であることの難しさとおもしろさ

を感じ始めたような気がする。

現在の医学部の教育では、私のような動機で疫学の門をたたく学生は少ないかもしれない。疫学には統計学や地理病理学をはじめいろいろな側面があり、アプローチの仕方によって幅広くとらえることのできる分野であるのに、講義では、国試のこともあるのであろうが、どうも計算式や定義ばかりが前面に出て、疫学のおもしろさの原点である（少なくとも私はそう信じる）記述疫学あるいは地理疫学的側面が学生の頭から離れがちというのが現状であろう。学生時代が記憶に新しいという立場から言えば、もっともっと学部のカリキュラムの中でこのような疫学の側面にふれる機会があれば、疫学に進む仲間も増えるのではないかと感じる。

がんをはじめとして疾病にはそれぞれの地理分布があると思う。地球上では、例えばエスキモーやインディアン、黒人のアメリカ大陸への移動や白人の南半球への移動など、その理由はいかにしろ歴史の中で大きな民族の移動が起こった。そして今現在の疾病の地理分布は、そのような人間の移動による環境要因・遺伝要因などの複雑な混合の結果が表現型として表されたものだと思える。例えばある民族が移動した地域にその民族に多い疾患が増加する場合もあるであろうし、移動する間にその疾患に罹患するような人は淘汰されてしまう場合もあるであろう。いずれにしても、常に背景にある地球レベルでの民族の変遷を考慮しながら疾病をとらえていく疫学を私はめざしていきたい。

日本がん疫学研究会臨時幹事会議事録

1992年1月29日（水）、福岡リーセントホテル（福岡）

昨年、第14回日本がん疫学研究会（会長：稲葉幹事）の総会において、幹事会で討議された「日本がん疫学研究会と日本疫学会との整合性」に関する内容が報告された。その時点では本重要項目について決議するには討議不十分ということで、第2回日本疫学会総会の前日に臨時幹事会を開き、その場で具体的な問題まで掘り下げた討議を重ね、それを全会員に図ることになっていた。

今回の臨時幹事会では、討議の叩き台として廣畑代表幹事と田島庶務担当幹事から以下のような私案が出された。

①一般演題を募集する形の学術集会は、日本疫学会と日本がん疫学研究会の両方の会で行う必要はない。日本疫学会のみで充分と思われる。

②がんの疫学的研究の発展の為には、講演会、シンポジウム、ワークショップ等を適宜開催し、勉強をしながら研究を進める必要がある。テーマとしては、例えばがん登録、がん血清疫学、がん遺伝子、がんウイルス、がん疫学若手研究者の集い、その他種々のものが考えられる。NEWS CASTの発行も継続する。

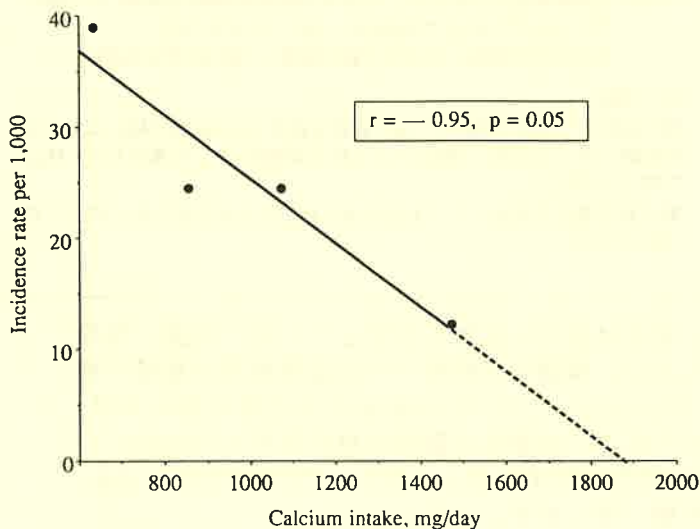
③日本がん疫学研究会は解消する事なく存続させる。但し、上記①②の原則に沿って運営する。これは日本がん疫学研究会が発足したときの原点に帰る形となる。

十分な討議の結果、基本的には日本がん疫学研究会を存続させるという上記提案に全体の意見がまとまった。但し、今後の日本疫学会の発展過程の中で、日本がん疫学研究会の位置づけと存続の整合性を常に検討していく必要がある。また、同研究会の継続運営に当たっては、代表幹事と他数名の幹事が集まり次年度、次々年度の研究会開催に関する相談など具体的な諸問題について検討し、来年度に開催予定の第15回日本がん疫学研究会（会長：大島幹事）の幹事会と総会で図ることになった。

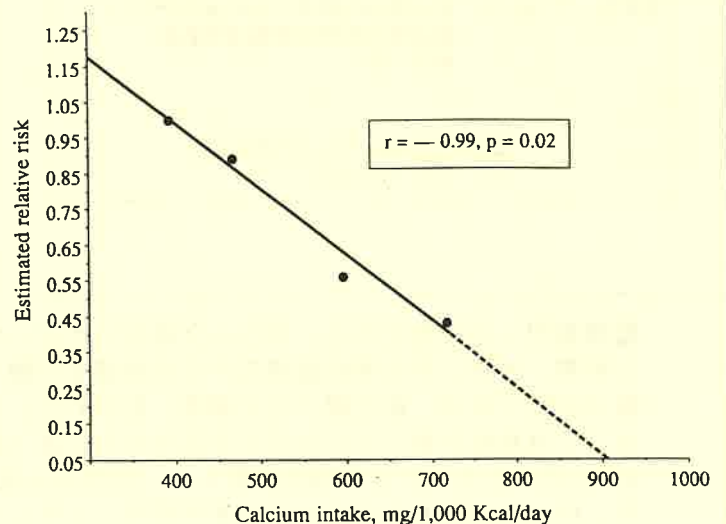
Epigraph 6

カルシウムと結腸がん

ビタミンD、カルシウムが結腸がんの予防因子として注目されている。本号のグラフは、Lipkin, M., Newmark, H.L. and Kelloff, G. (eds): Calcium, Vitamin D, and Prevention of Colon Cancer. CRC Press. からの引用である。



Incidence of colon cancer according to calcium intake, men ages 40-55 years at baseline, Chicago, Illinois, 1957-1977. (Garland, C., et al. Lancet, 1, 307, 1985)



Estimated relative risk of colon cancer according to calcium intake per 1,000 kcal, women ages 40-79 years, Utah, 1979-1982. (Slattery, M.L., et al. Am. J. Epidemiol., 128, 504, 1988)

第15回日本がん疫学研究会

会長：大島 明

主題：がん予防の実践とその疫学的評価

日時：平成4年6月12日(金)

場所：コミュニティプラザ大阪コンポホール

演題申込締切 3月末

講演抄録締切 4月末

連絡先：大阪市城東区森之宮1丁目6-107 〒536

大阪がん予防検診センター検診解析室内

第15回日本がん疫学研究会事務局

TEL: 06-969-6711 内線553

FAX: 06-969-6720

第13回国際疫学会学術集会のご案内

国際疫学会 (International Epidemiological Association、略称 I E A) はWHO公認の非政府機関 (NGO) として、1954年にJohn Pemberton、Harold N. Wiillardらによって設立された、疫学分野における唯一の国際的な学術団体であります。本会は3年に1回定期の国際学術集会を開き、大勢の疫学関係者が参加しています (前回は1990年8月ロスアンゼルスで開催され、世界64カ国から約900名参加)。そのほか地域集会、シンポジウム、セミナーの開催、疫学関係の書籍出版、機関誌発行 (International Journal of Epidemiology) など活発な学術活動を行っています。現在約1,800名 (110カ国) の会員を擁し、わが国からも140名の研究者が登録しています。

今回の学術集会は、1993年9月26日～30日にオーストラリア国シドニーにおいて開催される予定です。I E Aの会員には近々案内がありますが、会員以外の方で情報の必要な方は下記にご連絡下さい。この際、ご関心のある皆様のご入会をおすすめいたします。入会申込用紙の必要な方も下記にご連絡下さい。

日本からも大勢の人が参加して、活発な学術交流をしていただきたいと思います。

連絡先 〒329-04 栃木県河内郡南河内町葉師寺3311-1
自治医科大学公衆衛生学教室
柳川 洋

電話 0285-44-2111 (内線3104)
FAX 0285-44-7217

日本衛生学会・日本がん疫学研究会 ワークショップの御案内

分子遺伝疫学 一実験医学的基礎とがん予防への 展望一

オーガナイザー代表 森本兼義
(大阪大学医学部環境医学教室)

1. 日時 1992年6月11日(木) 午後1時より午後5時30分まで

2. 場所 大阪大学医学部講義棟E講堂

3. 主旨

がん・循環器疾患等の健康破綻の予防並びに老化制御の科学的方法論の樹立は社会医学上の重要な課題である。本ワークショップでは、がん罹患の遺伝的なハイリスク集団を同定する分子遺伝学的方法論と共に種々の有害因子負荷による染色体DNAの変異を個人個人のレベルで定量的に評価する手法について現時点での成果を統括し、予防医学・健康増進理論とその具体的な展開について総合的な議論を行う。

4. 主催

日本衛生学会、日本がん疫学研究会

5. 問合せ先

〒565 大阪府吹田市山田丘2-2 大阪大学医学部環境医学教室 竹下達也

TEL 06-877-5111 内線5412, FAX 06-878-7414

(4月6日以降は 06-875-7461(直通), FAX 06-875-7459)

6. 交通

●大阪駅または新大阪駅より地下鉄御堂筋線(北大阪急行線)にて千里中央駅下車(20分)→阪急バス(阪大本部前行き;6番のりば)終点下車(15分)

●大阪空港より阪急バス(千里中央駅経由阪大本部前行き)終点下車(約45分)

編集後記：富永先生から、辛口の文章をいただいた。続きは次号に掲載を予定している。反論、共鳴の言葉、感想、その他会員諸氏からの投稿をお願いしたい。本誌の目的の一つは会員相互の意見・情報の交換である。新企画「VF通信」を始めた。V (Veteran) とF (Freshman) それぞれお一人ずつに、毎号何か書いていただく予定である。第1回の今回は、本研究会顧問の倉恒先生とFreshwomanの井上さんから原稿を頂戴した。日本がん疫学研究会は解消することなく、当分続きそうである。News Cast もこのまま続けますので、よろしくお願い致します。(し)

発行

日本がん疫学研究会

事務局 〒464 名古屋市中千種区鹿子殿1-1 TEL 052-762-6111

愛知県がんセンター疫学部 気付 振替口座 名古屋1-37001

編集責任者

清水弘之

小川 浩